

W. Somerset Maugham とイギリス

佐 藤 孝

W. Somerset Maugham and His England

Takashi SATO

(昭和47年11月1日受理)

Maugham ほど自らの作品、思想、生涯について記述した作家に数少ない。ある場合には語り過ぎることが彼個人としての、或いは作家としての劣等感に結びつけられ批評の根拠とされてきた。生来の吃り、両親に早く死別したこと、所謂「書齋派」の文学者でなかったという劣等感、Pater, Wilde の唯美主義、Flaubert, Maupassant のフランス写実主義からリアリズムへの移行、更に Joyce, Woolf の心理主義、Lawrence, Huxley の批判文学へと激しく流れる文壇の主流から疎外されたことに根ざす劣等感との関連である。

Maugham の彼自身を語る饒舌は時には語らざる部分の遮蔽物の役割を果している。著作活動という名の

Tapestry の最後の糸となる “The Summing Up” でも
There are few subjects within the compass of my interests that I have not lightly or seriously touched upon. (1)

と述べ、語られたものに首尾一貫性を与えるのが目的であるからとして新しい証拠の提出を拒絶している。つまり Maugham は作品、生涯について多くの分析を発表しているとはいえ、彼自身も認める如く評者の立ち入りを許さない範囲が厳然として存在しているのである。全ての作家にあってこの事実は当然のことであるが、非常に開放的に語られる世界と突然の寡黙の世界が Maugham ほど歴然とした場合は少ない。

その ‘The Enigmatic Somerset Maugham’ に接近することが彼の死後の最大の課題と思われる。Robin Maugham の “Somerset and All the Maughams” と Beverley Nichols による “A Case of Human Bondage” は生前に明らかにされなかった Maugham の一面を夫々肉親とジャーナリストの立場から足まめに蒐集した資料に基づく綿密な著作である。しかし結果的に Maugham 自身が何らかの形で発表した考え方、生き方を別の角度から別の事実をもって裏付けした形になり、Maugham

が語り明かさなかった部分は依然として存在することは否定できない。この解明は新資料の奇跡的な発見が無ければ期待できぬことであろう。

しかしここに極めて本質的な疑問が浮かぶ。全く語られない彼の側面は彼が好んで幾度もとり扱った題材の中に巧妙に隠されているのではないか。“The Summing Up,” “A Writer’s Notebook,” “Points of View” 等に述べられる思想の大半は彼の作品の中に追跡することができ、その裏付けは従来の Maugham 研究の中で完全に近い程の成果を挙げてきた。しかし小説、劇の中で彼の評論、随筆に対応しない部分が存在し、それ自身の検討が若干等閑にされていると言える。

この小論は、Maugham によって描かれた小説の世界で彼自身の評論、随筆に結びつかない世界をさぐり、Maugham の寡黙の世界を訪れるのが目的である。

1. Maugham と故国

フランスからイギリスへの汽船の舷側に立って初めて目にしたドーヴァーの白壁、故国イギリスの姿を Maugham は、80年も後にも思い出すことができた。パリ生れの彼にとって、この父母の国は異国の地と言えた。この後に続く Whitstable での生活と、フランス流の英語を吃り勝ちに話した Canterbury での少年時代は Maugham の心に故郷と異国の意識を深く植えつけるのに充分であり、故国の中でイギリス人であることを意識せず、ドイツ、フランス、南洋にあってイギリス人であることを誇る心境になる。

故国にありながら異国を味わう少年 Maugham の心は、異郷にあって帰り得ぬ故郷の空を慕うイギリス人に投影され、南洋、中国を舞台とした多くの小説を生む。故国を離れた生活で故国への愛情がたかまえる人間の性情を考えるなら、Lawson, Ethel (共に The Pool), Morton (Virtue), Grosely (Mirage) 等の自己追放者が同時に

故国を最も愛する人々であったことが理解できる。

There was always before him the mirage of London, the Criterion Bar, himself standing with his foot on the rail, the promenade at the Empire and the Pavilion... This was life and love and adventure. This was romance. (2)

この Grosely を見事に裏切ったイギリスを Maugham はある種の快感をもって描くが、彼のこの Cynicism は個人として孤独に自立させる孤独性の為に故国を精神的に亡命する心を癒す安住の地であった。

心血を傾けた “Of Human Bondage” はアメリカの Theodore Dreiser のみが ‘The song sings, it has color. It has rapture’. と激賞したものの5年もの間、故国イギリス読書界に晒されていた屈辱は多年にわたる名声と富の為に後年幾分か和らいだとはいえ、Maugham の心に大きな傷痕となって残ったことは事実である。

Certainly I have noticed during these few months an adulation of your name in the more vulgar portions of the popular press. (3)

と冷やかに弟宛の手紙を認め、更に600頁に及ぶ自伝の中で

I need not describe the works of my brother William Somerset Maugham. (4)

と記した兄は故国イギリスを代表する the Lord Chancellor であり、Maugham の四つの劇が同時に上演された時ですら沈黙を守った兄であった。

晩年、

He was an odious man. I have met many detestable men in my life, but your father was easily the mer-most detestable. (5)

と兄の息子 Robin に向かって言い放った Maugham は故郷よりの意識的脱走を終えた Maugham であった。

Maugham の作品の中に直接表現されることはなかったが、

I'm attached to England, but I have never felt myself very much at home there. I have always been shy with English people. To me England has been a country where I had obligations that I did not want to fulfil and responsibilities that irked me. (6)

と述べ、故国よりの離脱を暗示している。

人間の根本に触れる精神的傷痕は後年の富や名声では覆いきれぬケロイドであった。晩年の彼の混乱は老齢の為ばかりでなく、‘all the miseries I have had to contend with in life (7)’ という消し去ることのできぬ心の痛手によると推測される。

昭和48年2月

Maugham は Bertha と Edward の闘争を見事に描くことによって文化と知性の点でフランスを称讃しイギリスを斥け、更に外国語の習得を無益としながらも唯一の例外としてフランス語を ‘the common language of educated men (8)’ と推奨する。また、

It was France that educated me, France that taught me to value beauty, distinction, wit and good sense, France that taught me to write. (9)

とフランス称讃が続くが彼にとってフランスとは ‘the author is almost as much at home there as he is in London. (9)’ の地である。こうしたフランスの記述は Maugham が文体について主張する ‘lucidity, simplicity, euphony’ を具現した文章であることに気付くときフランスを描く彼の心は緊張と充実感に満ちていたことが知られる。Philip Carey の Paris 訪問を、

It was June and Paris was silvery with the delicacy of the air. Philip felt his heart go out to the people. Here he thought at last was romance. (10)

と描く Maugham の筆は軽快である。

一方、青年期における London, St. James's Park, Piccadilly の描写が ‘vengeance, grey, uncertainty, dark waters, dingy, obscured, helplessly, disordered’ という暗い印象を与える語で構成されている¹¹⁾ ことはイギリスに対する Maugham の直観を物語るものとして興味深い。

彼の紀行文の叙景描写が人物の魂の状態描写ではなく人物の織りなすエピソードの padding に過ぎぬのは彼の関心が人間観察にあり、異国で故郷を思いつつ、或は無理に故郷の思いを断ち切る日々を送る人々の中に人間としての共感を見出し、彼等を描くことによって作家としての充足感と共に、彼個人の隠れた ‘己れ’ に安らぎを与える意志が内在していたからであろう。異郷におけるイギリス人が志向性を持つ人間から無償性の人間に転化し見事に造型されている事実は、その人々に対する作者の共感なしでは説明できない。

2. 異郷のイギリス人

Maugham の1916年からの南洋への旅行はその後の短編に結実する。その旅行は Leslie. A. Marchand に宛てた1928年の手紙によれば「私が若い頃フランスで生活したことや英国では私を絶対に安心した気持ちにさせないある事情の為か、私の心に訴える。」旅であった。

Maugham がその旅行で接触し、その多様さに心を奪われ創作心を燃やした南洋でのイギリス人はどのような思いを抱いて異国の地で生活していたか。異郷での生活を

強いられ、或いは自らに課している人々の心の中に自らの心情と共通しのもたを感じとった Maugham の精神的遍歴とは何か。

‘to be free for ever from those pains and unhappy recollections’ の為に ‘everything I then knew⁴²’ を注ぎ込んだ “of Human Bondage” の後はイギリスを舞台とした小説は書けないと感じ、新たな素材を求め南洋に向った。そしてその地のイギリス人の心の中に “Of Human Bondage” ですら調伏できなかつた亡霊を見出すことになる。

ヨーロッパ大陸側からは離れ小島とされていたイギリスは、四季太陽の光り輝く広大な天地への強い憧れから 1585年のイギリス・スペイン戦争を出発点として南洋諸島に着々と地歩を築いた。農業国から工業国へ転化する時期に合わせ自由貿易と自由競争は通商競争で勝利をおさめるという信念に支えられオランダをも凌ぐに至り、当初から帝国主義的活動の所産ではなく本国民の自然的移住を基盤にして「建設せよ、強健ならしめよ、植民地を疲弊さすなかれ」との方針の正しさを立証することになる。一方、民間人や民間企業体の労苦は大きく、当然その世界には規律とまじめな行動、道徳的に高い生活が要求された。

原住民と planters の関係は Maugham の紀行文、短編の中で明確な輪郭を与えられる。原住民に対するイギリス人とフランス人の態度には大きな違いがあった。フランス人は原住民と共に食事し遊びもし、人間として平等であることを認めていたが、イギリス人は自国人だけで一つの社会を形成しその枠を出ることをしなかつた。これはイギリス人独特の実際的な態度であり、事実の面でのみ原住民と接触し平安と正義と福祉を与えるが、個人生活の範囲を同国人の交際のみにとどめ租界の状況の中に祖国との絆を求める一つの環境処理の方法であった。しかし植民地の繁栄の恩恵に浴した本国人の意識から遮蔽されているところに幾多の悲劇が生れている。

the Government Officials, planters と原住民との関係は言わば支配、被支配のパターンをとり前者に優越感をもたらすのは当然の帰結であるが、‘thousands of miles from any of our own people, surrounded by darkness⁴³’ という淋しさ、疎外感には時には支配者としての優越感、使命感を打ち砕く。植民地支配の犠牲となった彼等を、Maugham は無時間的世界としての真相としてではなく人間生活の劇化という形で適確に捕捉する。

同じイギリス人であっても the Government Officials と planters では生活ぶりが違っている。planters は一般に

They have the vulgar minds, occupied only

with rubber and its price and the sports of their club.⁴⁴

であって男性は二流の学校を卒業し酒にひたり、あれは良い奴だとの評判を得れば満足する人々であり、女性はイギリスの小さな町におけるよりも更に偏狭な交際で満足する。また生活程度は概して低く、

I've known of planters sleeping in the street because they hadn't the price of a night's lodging.⁴⁵

というみじめな暮らしに耐える planters もいた。こうした planters が the officials に対して抱く感情は羨望と侮蔑の双方であった。

the officials は「金箔の馬車を乗りまわし、ピロードの上衣を着る」参事とか、「喋あるいは甲殻類の性質や型、種類などを静かに観察」して終日を過ごす駐在官であったりする。典型的な the officials の姿は

He regards the natives as wilful children, unreasonable and only just human, who must be treated without any nonsense, but not unkindly.

He boasts that he keeps his island like a new pin.

⁴⁶と述べられるが、Maugham のこの観察は ‘They looked upon me as a father.’ と豪語する Mr. Walker (Mackintosh) や ‘He was judge and tax collector, father and mother (at twenty eight).’ という Mr. Morton (Virtue) の集団を形成する。

the officials や planters の社会が原住民の社会と明確に区別されていて原住民の関知できぬ治外法権的な存在であったことは ‘Footprints in the Jungle’ において明らかにされる。Mr. Cartwright が Bronson の殺害に関係のあることは周囲の事情から確定的であるにもかかわらず、友人を殺害して妻を奪うことが白人同志の間であってはならない事態である為に警察署長の Gaze は追求しない。‘A perfectly decent fellow may be driven by circumstances to commit a crime.’ という彼一流の人生哲学は隠れ蓑にすぎず、Gaze の言う fellow から原住民は除外されている。白人社会の秩序の維持は原住民の犠牲において成立しているのである。

以上の三集団とは別に宣教師の団があり、植民地における人々に大きな影響を与えている。しかし宣教師が異国で生活するのは神に仕える平凡な信者としてであって、彼個人の中には必然的な要因は存在しない。幼時の生活から充分察せられるように Maugham は宣教に対して好意的と言えず、宣教活動を無益とした。The Reverend Mr. Carey (Of Human Bondage) や俗臭の強い野心家の牧師 (Loaves and Fishes) と攻撃をゆるめないが、the Reverend Mr. Davidson (Rain) は Maugham

によって最も悲惨な取り扱いを受けた人物であろう。植民地における宣教師も Maugham の鋭い批判を免れぬが、Maugham の故郷への観念を通して描かれる時、神の真理に対する盲目的な愛はいつしか人間世界の現実に対する共感へと変貌する。

3. 故郷と異郷

Maugham は “The Complete Short Stories” Vol. III の序で彼の描く南洋の小説に the tragic side があることを認めつつも、その人々が exception であると述べている。一般の人々は生活に満足感を抱いていると強調してもいるがその人々の心の奥底にイギリスを求める心情が強く存在し特殊な人間関係を生む要因になっていることを否定するものではない。彼がそれを積極的に肯定しその郷愁が悲劇の根底をなしていると明言しないところに作者の差恥とためらいが感じられる。南洋において singularity をみせる人々もイギリスにあっては周囲の人々に埋もれている平凡な人々なのだが、その人々が南洋で特殊な人間関係の中におかれ西欧の文明という衣をとる時に人間が本来持つ個性が明確になる。この意味では、彼等は決して exception ではなく typical な存在と言えるのである。

3-1 帰らぬ人々

異郷に去り孤独な芸術の旅に出た Strickland は Maugham が描いた人物の中で最も個性的な人物の一人である。一度訪れたら必ずその魅力の虜になるというタヒチを ‘here is a place to which he mysteriously feels that he belongs to⁹⁹’ と感じた彼は追求してやまぬ芸術の極致をタヒチに求めその感情は美の崇拜である。Maugham が青春時代に関心を示した芸術至上主義がリアリズムの作家である彼の心の底に根強く生き、ゴーギャンと作家の分身と言える Strickland の誕生をみる。しかし「死ぬまでタヒチにいる。」と述べる Strickland に対し、現実のゴーギャンは世間からも家族からも嫌悪されていることを知りつつも、「足が良くなったらフランスに帰り南フランスに住もう。」と故国を懐かしみ、現実の Maugham と相通じる感情を示している。Strickland の世界は現実の世界とは次元の異った狂熱的な芸術創造の世界であって、そこに通常の意味での故郷の概念を求めることは困難であるが、彼ほど捨身になって故国を去った人間はいない。美の形成と共に彼の中で徐々に強まりゆく社会的関心の拒否は、芸術家の道と亡命者の道は同一線上にあることを示している。Maugham は Strickland を描くことによって故郷を捨て、芸術の世界に沈潜し得た芸術家の理想の姿を表現し、故郷に対し

断ち切れぬ情愛を持ち続け魂の自由に到達し得ぬ芸術家 Maugham の苦しみを昇華させている。

故郷よりの離脱が生活の要件となった人間に Thomas Wilson (The Lotus Eater) がいる。しかし彼の場合は本国の年金という大きな絆に縛られていた。解放されて南洋の自然の中に投入できると感じたその瞬間にそれ迄よりも大きな足枷をはめてしまう。その矛盾をそのままに彼はカプリの満月に安逸をむさぼり、結局は自ら捨てた世界に晩年をゆだねることになる。彼の心の片隅にその予感が期待となって存在していたから南国の美に酔いしれることができた。Maugham は彼の生活を死に至るまで執拗に追求し、故郷を捨てたと考える人間に見事な復讐をとげる。Wilson は ‘A man who has boldly taken the course of his life into his own hands¹⁰⁰’ であり、人間の幸福を何処に求むべきかをよくわきまえた Maugham 好みの人物なのだが、‘to stick to the point like a grim death¹⁰¹’ と主張する Maugham には珍らしく小説の the point を延長し、短編の構成の枠をはみ出した作品となっている。

第一次大戦という特殊な状況の中で「偏見も偏愛もなしに人間の研究を続ける」結果として生まれた “Ashenden” の ‘Miss King’ は、重大な情報を伝える前に死ぬ老婦人という受けとり方が一般の解釈であるが、その情報とは国家の秘密ではなく老婦人の心の秘密である。彼女の長く苦しい外地での活動を支えてきたのは ‘England’ に今一度帰れるという望みであった。彼女はその望みを実現せずに Ashenden—Maugham の前で死ぬ。毅然とした態度で故国の一片もみせず Ashenden を寄せつけなかった彼女の心を占有していたこの望郷の念を、深夜の他国のホテルで聞かされ、そこに自らの心をみた Maugham はその死をスパイ活動のみに結びつけて創作する。異郷で死ぬ人間の惨めをそのままの姿で表現せずに、ある背景のもとに劇化したことは Maugham が称讃する Maupassant について

He arranges it (life) in order the better to interest, excite and surprise.¹⁰²

と述べたことに一致している。

Maugham の小説の中で南洋の美に身を委ね

I hope that I shall be able to look back a happy, simple, peaceful life. In my small way I too shall have lived in beauty... It will profit a man little if he gain the whole world and lose his soul. I think I have won mine.¹⁰³

と自信を持って語る人々は種々の挫折感を抱いて故国を離れた人々である。父の破産にあった Edward (The Fall of Edward Barnard)、妻と娘に夭折された Wilson

(The Lotus Eater), 健康をそこね一年の命と宣告されている Neilson (Red) 等, 自国あるいは彼等を包んできた社会を捨てざるを得ない人々である。孤独な自我に託して生きるには自我自身なものに支えられねば不可能である。南国の美しさはそれ自体で人間の心の全てを捉えるのではなく、故国に代るものを求めていた彼等の心の空虚さを満す対象であったことが知られる。故国に拒まれることによって、故国は彼等の到達できぬ遠方に離れ、彼等の憧憬となる。その時、彼等は南国の美の中に自らの憧憬を拒絶し自らを拒んだ故国への復讐を試みる。

主要な人物が全てアメリカ人であるという点で “The Fall of Edward Barnard” は貴重な存在である。この中で Maugham は物質文明の中に育った Isabel をして ‘Poor Edward!’ と語らせタヒチの美の中に人生の意義を見出し、自由に恵まれた生活を送る Edward と対比することによってアメリカ文明に痛烈な批判を加える。しかしこの作品を Edward と Isabel の個性の劇化という視点で捉えず Edward の人生の流れに視点を合わせるなら、そこに作者の人生観の巧妙な劇化を見ることができる。

父の破産に遭遇した Edward は一、二年の予定でタヒチに渡り、理由を明確にせぬまま帰国を延ばす。しかしタヒチに着いた時点でタヒチに圧倒されたのではない。彼がタヒチに心を奪われるのは今一人の挫折者であり祖国喪失者である Jackson を通してである。故国を放逐された Jackson は心に残る幼時の記憶、静止せる心の映像を ‘the vast calmness of the Pacific’ に求めそこに eternity を感じとる人間である。Edward は故国に帰り得るという点で Jackson とは根本的に異なるのであるが、Isabel という女性の存在が促進剤となって Edward の心情は南国の美に向かい、Isabel を拒絶することで南国への愛を確かめる。故国を捨てて心の平静を得たと信じる Edward, 自身の個性を消し去り、自己及び故国に対して無関心たり得ると信じる Edward に Maugham は文字通り ‘The Fall’ の烙印を押したと考えるのは酷であろうか。

3-2 帰り得る人々

次に故国に帰り得る立場にありながら幻滅を恐れて帰国せず夢を抱きつつ抑制の生活を送る人々がいる。流浪の中であって安住の喜び、休息所に対する愛ほど心を鎮めるものはないがこの人々はそれを拒絶する。

He would not go home because he would not bear to see again what he cared for so much, he would not read his books because they reminded

him of the life he loved so passionately. ④

こうして感情を虚無化させる絶望の風土の中に生きる人々の一人に Mr. Wingrove (Fear) がいる。a jealous God を恐れて violent repulsion を感じる中国へと走ったこの宣教師に Maugham は中国に対し偽りの愛を示す皮肉な役割を与え忌避している。

更に故郷とはクリスマスに贈物を送るのみの関係で、任期を終えても帰る意志がなく、余生を上海で送るつもり The Taipan がいる。彼はイギリスへの帰国が失敗に帰する多くの例をみている。その彼が突然中国に something ghastly and terrible を感じ panic stricken になる瞬間が訪れるがそれは彼の死の瞬間でもある。彼の見た the grave は実在するものではなかった。20年にわたる中国での生活は幻影であり the grave に凝縮されて彼の前にその形骸をさらけ出す。ここで過去と現実とは比喩的に結合し、the grave は過去のものになった彼の栄光と同時に現実となる彼の間近い死を示す。彼の手紙は彼の魂の夜明けを予感させるものであるが、死を伴う形であることに Maugham の人生観がうかがわれる。Maugham は死を一つのエピソードとして扱う臨床的態度を貫き、死の意識を深く追求することはない。しかし人間の条件のうちし絵とも言える死の意識は無視される時、大きな支配力を伴い、人間の郷愁の念を呼び起こす。生への希求は故郷への憧憬と同時に存在し、それによって強められる。思いがけぬ郷愁の念に苦しむ作者の姿をここにみることができる。

彼の手紙と死の間に存在するのが “A Man from Glasgow” の Robert である。彼もまた故郷と任地の間を精神的に流浪する魂の喪失者として描かれる。孤立から亡命への道のりは一歩にすぎず The Taipan の魂がたどった死の道行きは Robert の狂気の深化の過程である。故国を愛するが、故国に異質感を抱かざるを得なかった Maugham は、現実に故郷を愛さぬ生活は不可能であることを知る故に、この二人の喪失者に愛情と同時に憤りを感じざるを得なかった。

故郷に戻ることはすばらしくして面白いことだが長く住むところではないとし、故郷を植民地生活のうっせきを晴らす場としか考えない Mr. Morton (Virture) がいる。Margery の virture が結局は夫 Charlie を自殺に追いやるのと Maugham の判断は “The Judgement Seat” での性の倫理を重視せぬ神の登場と一致し興味深い。この Margery を求め望みを果せずにしまう哀れな Morton を Maugham は冷く描く。Morton の植民地での働きは彼にとって一種の叙事詩的な性質を帯び数えきれぬエピソードを伴って展開する偉大な物語であるかの感を抱かせるのだが、それが彼に破壊と不幸を与え

る無限の哀感を伴った無常な時間の疾走の一形式にすぎぬことを Morton は知りぬいている。Maugham はこうして故郷に帰るといふ贅沓な特権を行使せぬ Morton を人生に無智のあまり、Charlie 夫妻の幸福を破壊する破廉恥な人間として描き、Morton の仕事は極めて重要であるが、束の間の価値しか持ち得ぬことをこだわりなき諦めをもって認めるべきであるとする。

‘Home’ の戯画化された George の姿は痛々しい。Maugham は珍らしくこの作品で現実の人間にはなし得ぬ復活を描き、流浪の身にある George の暗闇を彷徨う姿に故郷への思慕を同化させる。George の幼年時代の土地は彼が亡命の中に投げ出された時も依然として彼の忠誠心の赴く場所であり、彼はその地を大切な荷物として背負い続ける。しかし彼の流浪はその地から逃れる旅であり、現実の地は記憶の中でしか蘇生できぬものである。Maugham が ‘Home’ においてこの錠を破ったのは故国では窒息するであろう George の個性をそこに引き戻し孤絶の結実がいかなるものであるか作家自身が納得する為であったろうと考えられる。

しかし全作品に孤独の影をみせつつも自己の魂と自己以外の人々の魂の救済を希求する T. S. Eliot の態度と違い、Maugham は「個」の解決の中に人間世界を認識する。強烈な自己愛に持続的な支配を受ける Maugham の描く人々は、自他の生活や生命を破壊して顧みず、我執の悲喜劇を演じる人々である。

3-3 帰る人々

外地に居住するイギリス人の郷愁は切実である。

I don't want to be buried out here, I want to be buried in an English churchyard. I'm happy enough here, but I don't want to live here always. I couldn't. I want England.²⁴

そしてその one ambition を現実化すべく故郷に戻る人々がいる。

‘The Pool’ に描かれる Lawson は故国と異国の間を彷徨する Flotsam and Jetsam であり、妻 Ethel の故郷と交錯し非情な世界を創造する。Lawson は彼を支える深い根を Scotland までたどることによって Ethel を Apia に結びつける絆を断ち切る。しかしそれは摂理への反逆であって、二人を包む自然の恩恵は進展するに反し人間の側で拒否する態度を示し、彼自身の根も死滅することになる。The Pool は二人の慰安の場所であるが人の生命を奪う恐怖の場でもあって、生命の水としての本来性を失い、人間を死に誘う機能を与えられる。Lawson は Maugham の作品の中で死に追い込まれる数少ない人々の一人であって、摂理を自分の望郷という美

衣のもとに否定し去ったことに対する Maugham の判断を示すものとして興味深い。

更に Grosely (Mirage) がその一人である。彼の前には常に Mirage of London が存在していた。賜暇では決して帰国せず、戻る時は引退する時であり、そうになったらイギリスを去るまいと決心していた。しかし彼の夢は現実の London によって一つ一つ打ち碎かれる。その時彼に China が新しいより大きな Mirage として浮び上がるが、その最後の Mirage が霧消することは死を意味する。ここに展開する人間劇は Maugham 自身の頭脳のメカニズムの風景であり、子供の魂のうえに閉め忘れた窓を通して苦痛なく安住の地に戻ることを願う Grosely の魂を作者の魂は冷たく拒絶することになる。しかし、Maugham は Grosely の生甲斐を奪うことを避け、現実にあざむかれた Grosely の心を人間愛のモラルによって救い、死と対峙させることはない。D. H. Lawrence の世界に生きる人々は逃避と魂の漂泊の旅に赴き、現実否定の反逆のモラルを貫ぬくに反し、Maugham の世界は生への積極的な愛が底流をなしていると考えられよう。

4. むすび

Maugham の世界は抒情的形態を示さないとはいえ、全く無関心、非個人的な人間世界の創造ではなく、個人の心眼に映じる人間世界の意識的な観察、いわば臨床主義のうえに創造される小宇宙である。

多くの相違せる現実の階層に住む人々の心理を病理学的に診察した Maugham は人間の多様性の中に自己をややまたない個性を示している。

故郷を離れ、遠く東洋に旅立つ人々は少数の場合を除いてはその脱出が精神の生理の必然の要求と言えぬ人々であった。故郷より脱却を企てた結果は故郷への没入に他ならなかった人々もあり、異郷にあって望郷の念を持続する困難に屈服し、現実化できぬ夢に代えて現実の瞬間の充実に走る人々もいた。いずれも離脱した故郷と自らの橋渡しできぬ断層に落ち込む人々であった。その点で望郷の意識と死の意識が同時に生起し、更に美の追求への欲求に結びつき理想と現実の深淵が並行する Pater の人物と一線を画す必要がある。

Maugham 自身の旅立ち枯渇したと自覚する創作力の復元を期す旅であり、人生の底に横たわる秘密を探る旅であった。その旅で最も畏敬の念を起こさせ、最も印象深かったものは、自分とは違った基盤で人生を追求する人々の姿であった。この旅の直接の所産であった短編小説の人物が一樣に抱く obsession は Maugham の自

己懷疑を通して生まれた自意識である。決定された条件のもとにおける自由意志の活動に接し、Maupham は人生を無目的な物理的決定とみなす考え方に修正を迫られ、au unconventional ethical point of view への道が開く。

と同時に彼等の obsession は作者自身の現実の醜悪に同化し、原体験への憧憬が成熟することになる。

望郷の歌を歌わなかった Maupham はこうして疎外、被疎外の状況の中で現実化できなかった自己と故郷の融合に終止符を打つ。

人間性を徹底的多元として把握する Maupham はその短編小説において種々の人間像を創造するが、それは「性格」の多様性であって「自我」における多様性と規定できぬ場合が多い。種々の人間像の根底となる自我は Maupham 自身の自我であり、それは故国よりの無意識的脱走と意識的回帰の交錯より生じた懷疑であった。

〈注〉

- (1) W.Somerset Maupham : The Summing Up (Heinemann, 1971) p.9 以下 W.S.M とする。
- (2) W.S.M. : The Complete Short Stories (Heinemann, 1968) Vol.3, p.1,409
- (3) Robin Maupham : Somerset And All the Mauphams (Longmans. Heinemann, 1966) p.189
- (4) Ibid. p.191
- (5) Ibid. p.168
- (6) W.S.M. : The Summing Up (Heinemann, 1971) p.95
- (7) Robin Maupham 上掲書 p.209
- (8) W.S.M. : The Summing Up (Heinemann, 1971) p.100
- (9) W.S.M. : A Writer's Notebook (Heinemann, 1952) P.270
- (10) Claude Searcy MacIver : W. Somerset Maupham (Philadelphia, 1936) p.28
- (11) W.S.M. : A Writer's Notebook (Heinemann, 1952) p.32 ; p.35 : p.46
- (12) W.S.M. : The Summing Up (Heinemann, 1971) p.188
- (13) W.S.M. : The Complete Short Stories (Heinemann 1968) Vol.1, p,11
- (14) W.S.M. : A Writer's Notebook (Heinemann, 1952) p.190
- (15) W.S.M. : The Complete Short Stories (Heinemann, 1966), Vol.3, P.1058
- (16) W.S.M. : A Writer's Notebook (Heinemann, 1952) p.92
- (17) W.S.M. : The Moon And Sixpence (Heinemann, 1966) p. 207
- (18) W.S.M. : The Complete Short Stories (Heinemann, 1968) vol.3, p.1277
- (19) W.S.M. : A Writer's Notebook (Heinemann, 1952) p.264
- (20) W.S.M. : Points of View (Heinemann, 1960) p.153
- (21) W.S.M. : The Complete Short Stories (Heinemann, 1968) Vol.1. p.66
- (22) Ibid, p.57
- (23) W.S.M. : The Travel Books (Heinemann, 1955) On A Chinese Screen, p.32
- (24) W.S.M. : The Complete Short Stories (Heinemann, 1968) Vol.3, p.1,372